



洋書輸入協会会報

Vol. 29 No. 8 (通巻339号) 1995年8月

理事会報告

7月27日(木)

(一) 6月分収支報告

7月13日(木)開催の総務委員会で審議の6月分収支について総務委員長の報告を承認した。

(二) 公取立ち入り検査のその後

3月9日公正取引委員会の立ち入り検査をうけた会員の担当者は5月以降現在までに4、5回平均公取りに呼び出しを受け担当官との話し合いを行った模様。

(三) 退会

予てより退会希望のあった明治書房の6月末、ゴールデンブック(株)の7月末それぞれの退会を承認した。

海外ニュース

アメリカにおける在宅学習者の増加と新しい市場

アメリカでは在宅学習者(Homeschoolers)の数が年々増加しており、出版社、書店に新たな市場をもたらしつつある。

かつてのアメリカの在宅学習者は、やや反政府的傾向を持つ保守的なキリスト教徒が中心だと考えられていた。

しかし、今日半数以上は現在の教育制度に問題を感じ、自宅の方が学校よりよい教育を与えることができると感じる親たちとなっている。

この市場の特徴は、市場そのものを見つけ、定義するのが困難であることだが、現在の在宅学習者は50万から150万人と推測されている。関連会議の出席者および関連ビジネス、在宅学習者向け通販カタログの増加は目ざましいものがある。さらにこの層は、書籍に関する関心が非常に高いことから、出版社の注目を集めるようになった。学年制度やカリキュラムに追われることがないため、需要のある書籍の種類は一般の学習書とはかなり異なると一般には考えられている。また、一つのテーマを深く学習する傾向があり、歴史、数学、地理、伝記などの需要が高いとも言われている。マーケティングについても色々な意見があり、通常の書籍でもキリスト教系の出版物に案内を載せてもらおうと、口コミが有効な市場であるため、会議に出席するなどして実際に消費者に会うこと等が挙げられている。しかし、学校教育環境に問題を感じる人々の増加とコンピュータの発達によって、在宅学習はアメリカの新しい教育形態の一つであり、一過性の市場としてではなく真剣に取り組むべき問題であるというコメントも紹介されている。

—Publishers Weekly July 17, 1995号より—

目次

理事会報告	1	追悼 R. エンデルレ氏	3	洋書輸入協会史88	5
海外ニュース	1	うちの会社	3	東京の坂と橋と文明開化60	7
JBIA ビアパーティ '95	2	文化厚生委員会だより	4	広告	8

JBIA ビアパーティ '95

今年で3回目を迎えたJBIA ビアパーティは、55社、266名もの参加者の熱気の中で始まりました。開催日の7月21日(金)は、まだまだ鬱陶しい、どんよりとした梅雨空でしたが、会場となった新宿南口、ホテルサンルート「芙蓉の間」だけは、溢れん許りの人で活気に満ちておりました。紀伊國屋の尼子さんの司会進行で、まず文化厚生委員長の紀伊國屋の吉本さんの開会の辞が述べられました。多数の参加に対して、謝意が述べられ、又我々の業界を取り巻く現実、長引く不況と、低価格に依る業績の低迷等厳しいものがあり、その中でJBIAの存在意義を示し、力を得るには、法人化をすすめるべきではないだろうかと言う様なお話がありました。更に元氣を出して、大いに楽しみましようと言う吉本さんの挨拶に続いて、口も滑らかな穂高書店の青柳さんに、力強い乾杯の音頭をとって戴きました。ベテランの会員の皆さんはもとより、若い人の参加も年々増え、とりわけ女性の参加者が、'93年が30名、'94年が45名、そして今年

は71名と大幅に増え、一段と賑やかで華やかなビアパーティとなりました。又今年も大洋交易の美女お二人に依る、楽しいビンゴゲームが行われ、賞品も沢山用意されました。或いは旧交を温め、或いは新たな知己を得、或いは飲み、食べと、それぞれに楽しい一時を過ごされていた様でした。

盛況の中、ナウカの辻さんの中メとなり、三々五々の散会となりました。今回も東亜ブックの鶴さん、大洋交易の和田さんをはじめ、文化厚生委員の皆さんが裏方として、多大な尽力をされた事を申し添えさせていただきます。貴重な挨拶や発言が、必ずしも正確に報告できなかったと危惧しつつも、それも又、会場の熱気と活気の故とご容赦頂きたい思います。ビアパーティで感じたエネルギーが、必ずや洋書の不況も低迷も吹き飛ばしてくれる事を念じつつ、会場を後にしました。

(文化厚生委員HN)



追悼 R. エンデルレ氏

5月24日に亡くなられたエンデルレ書店のルーペルト・エンデルレさんについて、短い追悼文をしたためることとする。

ドイツ、フライブルグのヘルデル社は世界の出版界にあって宗教分野をリードする、歴史のある出版社であるが、エンデルレさんは14歳の時、同社に入社。出版や書籍販売についての研修を積んだ。

スイスに近い町にあって、登山を好み、ヨーデルをよくし、またサッカーの選手でもあった。いうなれば「よき時代のよきドイツ人」としての彼は社業にも頭角をあらわし、社長ヘルデル・ドルナイヒの認めるところとなる。ある日、彼を待っていたのは、思いもかけぬ東洋への赴任命令であった。彼は仰天し、またその時すでに彼の生涯の伴侶となることを決心していた婚約者は涙にくれた、という。

当時、ローマ教皇ピオ十一世は、日本のための「カトリック大辞典」の刊行を念願し、上智大学とヘルデル社にその実現を託しエンデルレ氏を連絡係とすることによって、その体制は整った。22歳の若さで父祖の地を離れたエンデルレ氏は1935 (S. 10) 年、横浜に上陸、はじめて…そして、それは爾後60年彼の足を支えるものとな

るのだが…日本の土を踏んだ。

1938年、新橋に店舗をかまえ、「欧亜書房」と称する。

やがて戦争の時代…。店舗の焼失、ヘルデル社よりの援助途絶と苦難の日々が続く。その頃のことであろうか、出版用の紙の配給を受け、それを大八車に積んで四谷の通りを帰ってきたが、たいへん暑い日で、「あんな辛いことはなかった」と後年述懐されている。

戦後は代理店の復活や洋書販売の先鞭をつけることに力を注ぎ、洋書輸入協会の前身「海外出版物輸入同業会」の発足にあたっては、結成時のメンバー19社の一員として参加している。

1986年、ローマ教皇は「聖シルベテト騎士団長勲章」を彼に贈り他年の労をねぎらったが、茅ヶ崎カトリック教会における葬儀の際、遺影にかけられたその勲章の赤い色が印象的であった。

ご子息・ハンス・エンデルレ氏が二代目社長として社業をつぎ活躍されていることは周知のことであるが、この機会に協会会員のみなさまへ心からの感謝を申しあげたい、とのメッセージを託されたので、それをお伝えしてこの小文を結ぶことにする。

(これはエンデルレ書店出版部長、山田剛太郎氏が「キリスト新聞」に寄せられた原稿をもとに、会報委が編集したものです) (K. S. 記)

うちの会社

(株) マクミラン出版社

弊社は本年6月無事に25回目の誕生日を迎えることができました。事務所設立当時(1970年)は、いよいよ日本経済が世界に向けて大きく羽ばたこうとしていた時期で、大学も新設・増設はピークに達し業界全体が一番活況を呈していた頃でした。弊社は英国マクミラン社の日本事務所として開設され、その後1977年に日本法人に改組されました。

弊社の基本業務は、英国マクミラン社及び弊社が代理店をしている他の海外出版社の出版物をお取り扱い書店に広く宣伝・広報することを旨にしております。それで賄えない分は補助的に卸業務をおこない店頭商品を中心に強化するよう心掛けてきました。

1984年にスタートしたシリーズ「Studies in the Modern Japanese Economy」は現在も出版活動を継続して既に10数冊の、日本の学者による英文図書出

版を世に出しております。現在の日米経済摩擦等を目にしますと、もっともっと我々の活動分野を拡げて、海外の識者に英文出版を通じて日本の現状・実体を知らせる必要性は増してくるのではないかと考えます。

尚、英国本社は創立以来151年間「現在の社主・第二代ストックトン伯爵・アレクザンダー・マクミランは六代目」独立系出版社の地位を守ってきましたが、本年5月ドイツのコングロマリット Holtzbrinck に持株70パーセントを譲渡し、その傘下に入りました。151年の社歴の内、25年間を共にしてきた者としては感無量なものがあります。これも歴史の1ページでしょうが、マルチメディアが喧伝されている昨今、マクミラン社は今後共何とか活字文化の伝統を継承して欲しいと考えております。 [田所 義丸]

囲碁同好会・箱根の集い

梅雨空の下「あじさい」の紫が目にしみる箱根湯本で、今年も恒例の「箱根碁会」(第28回)が開催された。

集うもの12名。会場の旅亭「ますとみ」は囲碁ファンの宿泊の多い宿で、広間には、はや碁盤もセットされている。ひと風呂浴びて、さっそく対局開始。スイス方式とやらで、四回対戦してその成績で順位を決めるという。素人とはいえ、年期のはいったメンバーだから、一局打つのにほぼ一時間はかかる。夕食までに三局はこなすように、との村山幹事の指示を守る者は数すくなく、途中で宴会となる。

宿の「おかみ」の心尽くしのご馳走をいただきながら、指導をしてくださる時本八段を囲んで、プロとアマの差とか、その他もろもろの碁碁談義に花が咲く。宴会でお酒がはいっても碁を打てるのか、と心配される方もいるかもしれないが、その点は鍛えかたも違う連中で、若かりし頃は、盤側にお銚子を並べて一盤中打ち明かしたという豪のものもいる仲間だから、少々ビールやお酒で影響されることはない。というわけで、どうやら日付が変らぬうちに公式戦の決着はついた。その後は、好敵手を迎えて鳥鷲を戦わすものあり、麻雀卓を囲んで夜のふ

けるのを忘れるグループあり、箱根湯本の一晩は深々と更け、そしてまた明けてゆく。

朝の食事をいただきながら成績が発表される。

優勝：内藤 勲(極東書店)

2位：鈴木和夫(メクレンブルグ商会)

3位：安達美元([元]丸善)

武田さんのあとを継いで昨年からの会の幹事を引き受けて下さっている村山さん(ゲーテ書房)には、ただただ感謝の他はない。明年7月13~14日の再会を約して帰途についた。



「囲碁同好会」の今昔

協会のいくつかの趣味のグループのなかで「囲碁の会」は最古参である。どのくらい古いかというと1967年5月に発行された「会報第1号」に文化厚生委員会の報告があり、そこに「委員会の事業」の①として、「囲碁同好会」があげられ(すでに成立、実行しています)との但し書きがある。報告者は洋販・渡辺正広とあるから、初代の文厚委委員長がこの会に注いだ、なみなみならぬ意欲が伺える。

この、正確に言えば1967年1月に発足した「囲碁の会」が初めて箱根で碁会を開いたのが1968年4月のことで、そのときの宿には碁盤の設備がなかったから、東京からライトバンで盤・石を運んだ記憶がある。

指導は、発起人のひとりであった東光堂の石内さんのお世話で日本棋院の石毛七段にお願いし、何年か後には、

さらに俊英の時本先生(当時三段、今は八段)が加わった。

会員の数は盛んなころは三十名近くもいたが、ここ数年、新会員の参加がなく、いささかさびしい思いがする。いま集まっている者も決して高段者ばかりではなく、級もちの者も多いので(但し年一回の箱根の会では、みな実力以上の待遇をうける。仲間うちでは箱根初段などと言われる。)ご興味のある方はどうか幹事(ゲーテ書房、村山)までご連絡いただきたい。会員がもうすこし増えれば、今のところ中断している月例碁会も復活できると思うので、お申込をお待ちします。

(文責、メクレンブルグ・鈴木)

洋書輸入協会史 (98)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

113 如文出版の閉鎖と除名

113.1 如文出版閉鎖の知らせ

昭和40（1965）年9月28日付、JBIA No. 215で、次のような急報が会員に流された。

如文出版（KK）閉鎖の件

本会々員 如文出版株式会社 加藤良三殿、今月中旬より営業を閉鎖し、業務を停止していることが判明致しましたので、取急ぎお知らせ致します。

其後の経過については判明致しませんが、外国に可成り負債を残している模様で、会員中にも同様問題を生じている向もあるかと懸念されますので報告する次第です。

当会々員より対外的に問題を起した事について誠に遺憾であり、当会全体に対する信用にも大きな影響を及ぼしますので、今後かかる事のなき様お互いに厳に自戒を要望致す次第であります。（以下略）

113.2 如文出版の債務

如文出版の債権者リストは大急ぎで作製された。それによると、如文の国内の債務は14社、計215万円余、海外の債務は33社、1,390万円余となっている。

113.3 如文対策協議

同年10月11日の理事会で、協会としての如文閉鎖対策を協議したが、金額もさることながら各方面に迷惑をかけており、除名の処置を取らざるを得ないのではないか、ということで意見一致。具体的には臨時総会を開いて承認を求めることとし、昭和40（1965）年10月13日付、JBIA No. 216で次のような要旨で会員に通知した。

記

本会規約第22条により、下記の通り臨時総会を開催しますので、万障御繰合せの上御出席願います。

日時： 昭和40年10月25日（月）

議題： 如文出版 KK 除名の件

同社は本年9月15日手形の不渡を出し、銀行取引を停止されまして、現在整理段階に入っております。海外取引先に対する買掛金の未払及び国内得意先にも負債がある模様の他、会員の一部にも迷惑をかけておりまして、これらは著しく本会の信用を失墜する行為であると思われましますので、臨時総会を招集する次第です。（以下略）

一方で理事会としても、このような事態の再発防止の

ために、規約上の不備があればこれを正し、協会への入会の審査規律も厳しくして質の向上につとめたらどうかなどの意見が出て、これらも臨時総会までに検討することとなった。

113.4 臨時総会において如文の除名決定

10月25日の臨時総会開催前に開かれた理事会において、如文に迷惑をかけられた海外の出版社側から、日本駐在の代表を通じて洋書輸入協会の理事会に対し、クレームが到着している旨の報告があった。この要旨は既に代表側から丸善の田辺氏へ口頭で伝えられていたものであり、その確認の書面である。

これの検討と、再発防止のための規約改正案と、これに伴う内規案の検討を行い、臨時総会に移行した。総会の結果は、昭和40（1965）年10月30日付 JBIA No.218で次のように会員に通知されている。

記

一前略一 ついで本題に入り、御出席会員46社により如文出版株式会社の除名を審議し、本会々員に対し9月15日不渡手形を出しましたので調査せる処、既に営業所も閉鎖し、銀行の取引も停止されたる事実が判明しました事は、9月28日 No. 215にてお知らせ致しました。これにつき海外取引先にも多額の負債があり、支払不能の状態に立至ったとは、在京出版社代表より添附（113.6項参照）の如き連名の申入れを受けたことについても明らかであり、本会並びに会員の名誉と信用を著しく失墜せしめる結果となったことに対し、本会規約第21条および第22条により、甚だ遺憾ながら除名を決議致しました。（以下次項に続く）

113.5 如文の件再発防止のための規約改正と内規設定 一前項よりの続き一

これについて将来かかる事のないよう、お互いに自戒することを申合せると共に、とりあえず規約第18条を下記の通りに訂正することに決定致しましたから、先日送附の新規約を御訂正おき下さい。

第18条 新たに本会に加入せんとする者は、会員2名（旧1名）の紹介をもって本会に申し込むものとする。

内規：については理事会の入会審査基準も、更に厳重にすることとし、下記の内規を決めました。

1. 海外との取引において最低3ヵ年以上の実績を持つこと。(従来は1年以上)
2. 今後申込み用紙に取引銀行を記入して貰い、信用調査をすること。
3. 同時に責任者の経歴書を提出して貰うこと。
4. 紹介者は少なくとも会費滞納の責任を負うこと。
5. 入会に際しては従来通り誓約書を提出して貰うこと。

次に上述在京海外代表者からの申し入れ事項については、当日御出席の方々にご意見を伺いましたので、理事会においてとりまとめ別紙の通り返事を致しました(別紙略)。

また別に被害出版社にも同社除名の通知をすることとし、これを理事会に一任されました。

なお如文出版社加藤良三氏に対しては、除名の通知と共に、本会々員並びに海外負債に対しては優先的に支払い方途を講ずるよう要請致しました。(後略)

以上洋書輸入協会としては、会員が海外や国内に対し、不払の事件を起しても、協会がその債務を肩替りしてやるというような財政的余力は全くない。従って倒産の可能性のあるような会社は会員にすべきでない。そのために種々な制約を設けたというのが、今回の規約改正並びに内規設定の趣旨であろう。

113.6 海外出版社の代表から理事会への申し入れ

前述した113.4項の冒頭で、海外出版社の代表から抗議を受けた旨を記したが、1965.10.25付のJBIA理事会宛の申し入れ文(英文)の要旨は次の通り。

洋書輸入協会員如文出版倒産の件

下記出版社の法的代理人たる下記署名の我々は、それぞれ本社より次の件につき協会員全員の注意を喚起し、懸案のクレームの満足かつ迅速な解決を得るために、可能な限り同協会の援助を仰ぐように指令されました。

——海外出版社7社の社名列記。米国4社、英国2社、オランダ1社。(社名省略)

我々の出版社は、財政的に健全で信用するに足ると思われた日本洋書輸入協会の一員が、破産を宣告せられたことに非常に驚いています。しかも同協会が、外国出版社の代理人、外国出版社自身、あるいは欧米両者の外国出版社協会のまきこまれる信用の危機について事前の通告もなく、この事態の到来を容認したことに不安を感じています。

外国出版社は我々に、洋書輸入協会が外国出版社に代

って、如文出版の負債解決に仲介の労を取ることが出来るかどうかを報告せよと求めてきました。我々はこの外国出版社の気持ちを洋書輸入協会員に伝えることを依頼されました。

我々の出版社は、また同輸入協会から如文出版のような事件が二度と起らないことと、同協会員の信用状態が危くなったときは、協会が即刻この事実を外国出版社に通報することの保証を望んでいます。

外国出版社が適宜な処置を講ずることが出来るよう、このメモランダムに早急な御返答を願いたいと存じます。

——前記各社7社の社名と、代表者の署名(省略)。

ただし兼任があるため、署名は7社5名となっている。

—— (以上)

113.7 海外出版社代表の申し入れ書の検討と対応

前述の理事会に対する申し入れに対し、理事会及び臨時総会の席上では、

(1) 海外出版社の日本代表こそ、その出版社のために日本の輸入業者の信用を常に調査し、把握しておくことが仕事ではないか。

(2) 先年英国の取次店 Simpkin Marshall が倒産し、日本の輸入業者は多大の被害を蒙ったが、その時誰が保証してくれたか。

(3) 若し申し入れ書記載の出版社が、洋書輸入協会々員とのみ取引しているのであればともかく、各社とも会員外の会社と取引しているではないか。

(4) 申し入れ書に署名の代表者が、我々の協会々員と取引を開始したときに、理事会へその信用状態を問い合わせて来たことは一度もない。

(5) もし我々協会々員の中で信用状態が若干悪化したところが出たにせよ、それについて理事会の方から倒産もしない前から通知するなどのことは、商道徳上も出来るはずがないではないか。それこそ日本代表自身の仕事であろう。

以上のような意見が百出したが、これをそのまま書面にしては角が立つこと故、先ず「当協会の会員に倒産をし、取引先に迷惑をかけた者が出たことは遺憾である」旨を述べ、ついで先方の要望に対しては、我々理事会はこの要望に応える立場にないことを返事することとした。この長文の書面は、1965(昭和40)年10月30日付で申し入れを受けた日本代表宛に送られている。

(この項続く)

日本橋と出版文化〔3〕

丸善・本の図書館 鈴木陽二

◆丸善の創業と出版事業

丸善は明治2年に横浜で創業し、翌明治3年に日本橋に進出した。改めて丸善の歴史を記すことはしないが、「日本橋と出版文化」という関係で日本橋に店舗を構えるに至った経過を少し説明することにしたい。丸善は日本橋品川町裏河岸（現室町）に経木屋を開いていた島屋を買収し、島屋善六という屋号で支店を開設したのが東京進出の最初であった。明治3年3月のことであったが、間もなく日本橋3丁目（日本橋2丁目の現在地）に丸善七店を開いた。島屋が丸善の店員の親戚筋に当たっていたというのが買収の理由であったが、もともと日本橋という伝統的な出版の町へ店舗を構えることを望んでいたのではなかったろうか。

丸善は創業早々より洋書を扱っていたことは福沢諭吉の文章で明らかであるが、洋書は別の機会に譲ることにして、今回は角度を変えて、初期のころの出版について触れてみることにしたい。この時代の丸善の出版物は、どちらかという教科書的な啓蒙書が多かったが、それは西洋の学術の吸収が始まって間もない時代の要求にこたえる出版事業であった。そして、教科書といっても日本近代化に寄与した重要な出版物が多かった。

丸善は日本橋に店舗を構えた明治3年に、早くも出版を手掛けている。最初の出版物は『袖珍彙説』といい、アメリカのウェーズ『ポケット・ドース・ブック』を丸善社長早矢仕有的の知人であった桑田衡平が訳した和本3冊ものであった。医薬品に関する本を最初に出版したのは、丸善が創業時から輸入医薬品を取り扱ったことと無関係ではなかったであろう。初期には医学書の出版が比較的多く、明治5年にはペンシルヴェニア大学の衛生学助教授であったヘンリー・ハルツホルンの『華氏内科摘要』やカトルの『初学人身窮理』などを刊行し、いずれも啓蒙医学書として広く普及した。

医学書以外でも日本近代化に貢献した出版物として見過ごすことのできないものが数多くあるので、それをざっと紹介することにしたい。まず社会科学では、明治初期における日本の思想界を席卷した社会進化論の唱導者ハーバート・スペンサーの本邦初訳である斯辺鎖『權利

提綱』（尾崎行雄訳）を明治10年に刊行し、ようやく受容の兆しをみせた進化論の先導を担った。明治10年に刊行された田口卯吉『日本開化小史』は古代から幕末までの日本の歴史を記述した主著で、バックルやギゾーの文明史観、スペンサーやルボックの社会学説の影響を受けて、日本史を新しい史観で記した画期的な歴史書として高く評価された。フランスの経済学者C. F. Bastiaの“Sophismes économiques”を翻訳した巴士智聖『経済弁妄』（明治11年刊）は自由主義貿易論を展開した明治初期の重要な経済学書であった。また明治12年に刊行された伯克爾『英国文明史』は、イギリスの歴史家H. T. Buckleの主著の翻訳で、福沢や田口を始め明治初期の日本の学者・思想家に非常に大きな影響を与えた。

文芸関係では、フランス小説の初訳でもあり、始めて原本から忠実に翻訳された小説として翻訳文学史上重要な出版物となったジュール・ヴェルヌ『新説 八十日間世界一周』（明治11年刊）、『春風情話』（明治13年刊）はウォルター・スコット『ラマムアの花嫁』を学生時代の坪内逍遙（橘頭三）が始めて翻訳した小説であった。外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の共著になる『新体詩抄』（明治15年刊）は日本でまったく新しい詩形を創造し、新体詩運動の先駆けとなった重要な文芸書であった。辞書・事典では、“Chambers' Information for the People”の翻訳がチャンブル編『百科全書』全12冊として明治16年に上梓され、日本で始めて公刊された欧米百科事典となった。明治19年の平文著『改定増補 和英・英和語林集成』はJ. C. Hepburn（ヘボン）が慶応3年に上海で刊行した辞書の第3版で、ヘボン式ローマ字が確定した版であり、また明治期を通して日本の辞書編纂に規範的役割を果たすことになった。

このほかにも、モンテスキューの『万法精理』（明治8年）、ミル『弥児氏宗教三論』（明治10年）、ベンサム『憲法論綱』の初訳（明治15年）、ジュリアン・ハックスレーの本邦初訳『進化原論』（明治22年）、明治期の一大奇書といわれたボッカチオ著『ボッカース翁十日物語 想夫恋』（明治19年）など、枚挙にいとまがないほど多彩な出版活動を行った。（完）

ウェルズリー・シリーズ

19世紀英国雑誌論文選集

第1集 言語と言語学 (全4巻)

The Wellesley Series

19th Century Sources in the Humanities and Social Sciences

Part 1: Language and Linguistics

Selected and edited by Roy Harris

(Professor Emeritus of General Linguistics of Oxford University)

1995年8月刊行予定 1,600 p. / 4 volumes

ISBN 0-415-12206-6 送料価格 ¥ 76,472 (消費税別)

(Routledge/Thoemmes Pr.) -UK-



19世紀英国では、“Edinburgh Review”(1802年創刊)、“Quarterly Review”(1809年創刊)に代表されるような論説誌が多彩に花開きました。その中には学問史上きわめて重要性の高い論文が数多く含まれ、とりわけ同じ著者により単行本として出版された著作と比べると、より率直な文体で、内容的にも踏み込んでいる点が注目されます。にもかかわらず、一部の著名誌を除いて日本での所蔵は限られていました。

このたび刊行が始まった“ウェルズリー・シリーズ”は、“The Wellesley Index to Victorian Periodicals”をはじめとする雑誌記事索引を活用するとともに、各分野の第一級の専門家による厳正なチェックを経て、重要な論文を集成していきます。第1集「言語と言語学」では、前半2巻に英語の綴字法・文法論・歴史・辞書編集・教育に関する論文を、後の2巻に言語起源論・言語哲学といった一般的な言語学に関する論文をそれぞれ収録しています。



日本総代理店

(株) 紀伊國屋書店

〒156 東京都世田谷区桜丘 5-38-1

ホールセール部

TEL (03)3439-0128 FAX (03)3439-3955

1995年8月

通巻第339号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎ (03) 3271-6901 FAX (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社